
ホットニュース(平成10年度／第12号)

●今月の業界ホットニュース／～地方の時代の文脈～

地方の時代と言われて久しい。当初は、右肩上がりの経済成長の過程で、大都市圏への集中の弊害を是正し、国土の均衡のとれた発展という文脈のなかで謳われてきた。

しかし、経済停滞と成熟化社会のもとでは、国際競争にも耐えうる都市間競争のなかで、個性を持って自立しうる地方や都市が求められるようになって来つつある。即ち都市間のサバイバルゲーム、戦国時代とも言えよう。

ところが、小渕首相の提案した生活空間倍増戦略プランの一つの柱である「地域戦略プラン」の計画づくりが難航していると報道されている。同プランは、個性あるテーマ性を持って複数都市が広域連携を図りつつ、ゆとりある生活空間づくりを目指すものであるが、各地域から提出された計画案は従来型の公共事業計画の寄せ集めの域を出ないようである。

的確な戦略無くしては戦国時代は戦えない。「地域戦略プラン」は各地域の今後を制する絶好の機会かもしれない。21世紀をかけて各地域が叡知を結集し、優れた戦略をたてることに期待したい。

●都市計画・交通計画の動向／～日本のODAとアジア経済危機～

二年前に日本政府は、財政構造改革の一貫として、平成十年度より3年間にODA事業費を前年度比10%づつ削減する方針を示した。実際、平成十年度のODA事業費は前年度比10.4%減少した。しかし平成十一年度政府一般会計予算では、逆に0.2%の増加(1兆489億円)となった。経済危機に陥ったアジア諸国への支援という新しい政策課題が、政府の方針を変えることとなった。

この間にアジア支援のためには、日本が従来力を入れてきたODAのスキームが有効であるとの認識が広がっている。日本政府が表明したアジア支援800億ドルのうち、ODA部分は4-5%を占めるにすぎない。しかし800億ドルの大半を占める金融安定化のための財政出動よりも、従来から続けてきたODA事業の方が理解しやすく、またその分期待も大きいのが実状である。経済危機により財政混乱に陥っている被援助国にとっては、必要な事業を実施するために、BOT事業が動きにくい今はODA事業は頼もしい援軍である。アジア支援のための特別円借款(3年間6,000億円)は、日本の従来の姿勢とは異なるタイドローンである。これはアジア支援と日本の景気回復を両立させるという明確なメッセージを発しており、従来はひも付き援助と揶揄されてきた類のものであるが、現在は国内納税者の理解を得やすくなっている。

このようにアジア経済危機は、日本のODAの必要性和存在感を、被援助国及び国内に植え付ける絶好の機会となっている。これは弊社の海外コンサルティング活動にとってもビジネスチャンスであり、このような環境の下にどのようなプロジェクトを提案して具体化できるか、コンサルタントとしての力量が試されているといえる。付け焼き刃的な取り組みでは良い仕事は叶わない。弊社がここ数年取り組んでいるインドネシア

・ジャカルタの地下鉄プロジェクトも、この新しい風を受けて大きく動く可能性がある。この間の計画作業より、プロジェクトの内容や成熟度については議論のないところと思われるが、経済混乱の最中にわざわざ地下鉄を作らなくてもという意見は予想できる。しかしながら、民間の都市開発が混乱のなかで止まってしまっている現在だからこそ、優良な大規模プロジェクトを公共主導で行う意義は社会的経済的により大きいと考えるられる。

●業務の紹介～都市計画を地で行く作業が目的の業務の紹介(後編)～

(続き)通常新幹線が整備されると、並行在来線はJRから経営分離され、存続の問題が浮上する。このため地元は当然のことながら存続の方向で頑張るが、存続のためには国(運輸省)の合意が必要である。そこで合意を得るための運動が展開され、誰が運営主体となるか、費用対効果はどうか、といった検討をしていかなければならない。今回のケースでは存続の方向にもっていくことはできそうだが、やはり地元が運営していくことになると重い負担ではある。

それよりも、やはりこれまで通りJRに経営してもらった方が良い。そのためには1そもそも並行在来線ではないという理屈付けと、2JRが経営したくなるような在来線である、というストーリーを構築していくこととなる。1については割愛するが、2のためには、これからの地方都市の在来線は、その都市や地域の生活や文化スタイルの軸として活性化していくといった論理展開を行い、都市内にさらに駅を増やし駅間の短い鉄道を中心にまちづくりを行っていくといった計画を立案する必要があるという。コンサルの真骨頂が発揮される場所である。

(この項終わり)

アルメックホットニュース(平成11年3月15日発行)

////////////////////